

“地域資源を活用し、グローバルレベルで戦う産業を創り出す”ビジネスモデル ～林業の6次産業化～

[2018・FW] 21521045 佐々木崇宏

1. 研究の背景と意義

私の地元、岩手県宮古市は、人口5万3千人の町で、観光や漁業に力を入れている。宮古は日本創成会議が発表した”消滅可能性都市”に指定されている。私は、故郷を絶やさないうために、若い世代が新たな町を創る必要があると感じている。そんな衰退傾向にある地域が今後も存続するために「雇用」を生み出すことが最適であると考え。新たな雇用を生むべく「地域資源活用」「市場は世界」をポイントにした。宮古市は約11万haもの森林を所有している。豊富な森林資源を活用し雇用、産業を生み出すことで、地域活性化に繋がると考える。

本研究で林業における課題を調査し、新たな林業のあり方を提案することにより、持続可能な地域を創ることができる点で意義があると考え。

2. 研究目的・方法

本研究の目的は3つある。第一は、岩手における林業の現状と課題を明確にすること。第二に、林業の課題を6次産業化によって解決できないかという点を考察し明らかにすること。第三に、岩手に新たな産業を生み出すビジネスモデルを提案することである。研究方法は、文献調査、事例研究、ビジネスプランの立案である。

3. 研究結果・考察

(1)日本の林業における課題

日本の林業の大きな課題は、複雑な流通構造による収益の減少である。木材流通の現状は、川上から川下までの間に数多くの事業者が関わっていることで、マージンが発生し、川上の林家の収入が減少している。その結果、大規模に山林を所有する林家が残り、小規模林家は経営意欲が低下し、放置された森林が増加している。

(2)新たな林業形態”自伐型林業”の可能性と課題

現行林業の課題を打開するとして、自伐型林業が注目を集めている。自伐型林業とは、法人が主体となっていく林業ではなく小規模で行う林業である。自伐型林業によって、小規模な零細林家でも収入を得ることができる。しかし、自伐型林業は、少人数で行うため、ビジネスとしてはスケール化が困難である。さらに、現行林業は機械化が進んでいるが、自伐型林業は手作業のため独り立ちまでに一定の年月がかかる。

(3)岩手の林業の可能性

岩手の林業には3つの理由から可能性がある。

①森林保有率全国2位②木材製材業135社③岩谷堂箆笥や浄法寺塗りなど数多くの伝統的技術

この豊富な森林資源・加工技術・伝統技術を組み合わせることで、世界に通用する産物を生み出せる。

実現には、木材の安定供給が必要不可欠である。そこで、ITを活用しベテランの経験と勘を可視化することで、手軽に生産できる仕組み作りが重要である。

(4)6次産業化の先進事例

佐賀県にある伊万里木材店は、川中業者を集約させ林業版6次化を実現させている。また、農業では株式会社GRAが、イチゴ栽培においてベテランの経験と勘をITを用いて見える化し、6次産業化と海外展開を実現した。

(5)新規ビジネスの構想

(1)～(4)を踏まえて、地域資源を活用した林業の6次産業化を世界と戦う産業として構想した。新たな産業を生み出すことで、持続可能な地域のあり方を目指す。

4. 結論

本研究では、「世界を市場とする新たなビジネスモデル～林業の6次産業化～」を構想した。

このビジネスモデルの前提は、

1. 岩手には豊富な森林資源と加工、伝統技術が存在する。
2. 新たな木材商品を生み出し、世界に向けて販売する。

これを実現するためのビジネスモデルを図で示す。

1次産業では、ITを活用して、生産効率を上げ、安定供給を図る。2次産業では、中間業者を集約させ業者間でのコスト・マージンの削減を図る。3次産業では、伝統技術を活用し高付加価値をつけた製品を製造する。

このビジネスモデルでのポイントは、単なる製品の販売ではなく、1つの製品ができるまでのストーリーを売る。市場は国内だけでなく、海外へ展開し、地方から世界へ戦う産業として構想する。

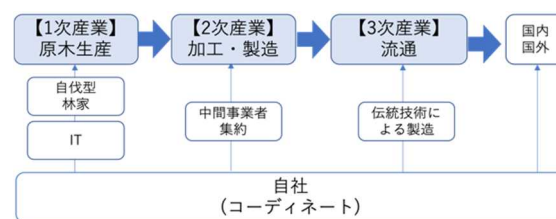


図 世界を市場とする新たなビジネスモデル